国指定史跡

上高津貝塚発掘調査報告書

—貝層断面剝離採取に伴う調査の概要—

上高津貝塚空撮

1989年3月

土浦市教育委員会

Cトレンチ南側断面

貝層下土層出土土器

国指定史跡

上高津貝塚発掘調査報告書

—貝層断面剥離採取に伴う調査の概要—

1989年3月

土浦市教育委員会

序

このたび、貝層断面剝離採取にともない、国指定史跡上高津貝塚の学術調査を行ないましたので、その概要を集録し発刊することとなりました。

上高津貝塚は、既に明治時代から学会に知られた関東地方を代表する縄文時代の大規模貝塚です。貝塚から出土する土器や貝殻そして獣や魚の骨などさまざまな出土品は、太古の昔、霞ヶ浦が海だった頃、海の幸・山の幸を生活の糧としていた縄文人の生活を彷彿させます。この貝塚は、昭和52年に国の史跡指定を受け、昭和61年度には44,048.42m²の指定地すべての市有化が完了しています。

今回の発掘調査は、昭和63年7月2日に開館した市立博物館内に展示する貝層断面の剝離採取のために行なったものであります。展示室にて、現地では観察することのできない貝塚の断面を見学することにより、ひとりでも多くの方々に上高津貝塚への関心をもって頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査及び報告書発刊に際してご指導ご協力いただきました鈴木公雄先生をはじめとする慶応義塾大学民族学・考古学研究室の皆様、そして地元有志をはじめ多くの皆様に心から感謝申し上げごあいさつといたします。

土浦市教育委員会
教育長　日下部　　晁

目　次

巻首図版

Ⅰ　調査の契機……(塩谷) 1

(附)調査会・調査団組織、調査日誌

Ⅱ　貝塚の位置と環境……(塩谷) 2

Ⅲ　調査区と調査方法……(安藤) 4

Ⅳ　調査概要……(安藤) 5

1.層序について

2.出土遺物について

Ⅴ　貝層の剝離採取……(塩谷) 7

Ⅵ　貝層断面の展示……(塩谷) 9

例　言

1. 本書は、土浦市上高津町字貝塚、柿久保・宍塚町字吉久保にある国指定史跡上高津貝塚の貝層断面剝離採取に伴う学術発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、慶応義塾大学民族学・考古学研究室の指導のもと土浦市遺跡調査会が実施した。
3. 編集は塩谷修が行ない、図面のトレースは塩谷が、写真撮影は石川功、塩谷が行なった。
4. 執筆は、安藤広道、塩谷が行なった。
5. 調査及び報告書作成にあたり下記の方々にご指導、ご協力をいただいた。

文化庁、茨城県教育委員会、市文化財保護審議会、市文化財愛護の会、小宮孟、山田昌久

Ⅰ　調査の契機

土浦市では、1985年度に、次年度公立社会教育施設整備計画書に博物館建設計画が提出され、1988年開館に向けてその準備がはじめられた。この間、博物館における展示内容の検討が行なわれ、原始・古代及び近世を中心とした通史展示という全体的な展示プランがまとめられた。このような内容には、展示可能な資料の量的な問題も含んではいるものの、土浦の歴史的変遷を紹介するうえで、その黎明期と現在の中心市街地の基礎となる城下町が形成された近世の二つの時代が重要な位置を占めるという考えが反映されている。

このなかで、原始・古代すなわち土浦の黎明期の展示構成については、多くの考古資料のなかでも質的にもまたその内容の多様さにおいても国指定史跡上高津貝塚の資料がその中核となるものと考えられた。そして、展示資料の一つとして貝層の剝離資料があげられた。

そこで、上高津貝塚の過去の調査経緯から、慶応義塾大学民族学・考古学研究室鈴木公雄教授に調査指導を依頼することにし、1986年12月10日博物館建設担当の岩沢・塩谷が鈴木教授のもとにおもむき調査計画の打ち合せを行なった。その結果、おおよその日程、そして資料採取地点を慶応大学が調査を行なっているＡ地点の既掘トレンチとすることなどを決定した。その後、国指定史跡における現状変更の届け出を行ない、剝離採取の作業を考古造形研究所森山哲和氏に依頼し、1987年11月16日～11月24日にかけて実施するに至った。

遺跡調査会・発掘調査団組織

土浦市遺跡調査会

会　長	永山　　正	市文化財保護審議会会長
副会長	日下部　晁	市教育委員会教育長
理　事	茂木　雅博	市文化財保護審議会委員
〃	田中　　昭	市都市計画部次長
〃	神野　幸一	市建築指導課長
〃	神林　栄久	市耕地課長
監　事	飯島　秀夫	市教育委員会教育次長
〃	滝ケ崎洋之	市企画課長
幹　事	佐野　賢治	市教育委員会社会教育課長
〃	岩沢　　茂	〃　文化係長(～S62.9)
〃	桜井　正広	〃　文化係長(S62.10～)
〃	石山　淳一	〃　主幹
〃	塩谷　　修	〃　主事(調査担当)
〃	石川　　功	〃　主事補(　〃　)

発掘調査団

現地指導　鈴木公雄（慶応大学教授）
　　阿部祥人（慶応大学講師）

発掘調査参加者
安藤広道（慶応大学大学院）、滝沢誠、岡林孝作（筑波大学大学院）、武蔵美和（筑波大学）、五十嵐忠吾、宇野喜一、佐藤英雄、佐野藤吾、下村長司、田中金蔵

遺物整理参加者
小松崎広子、須貝和子

剝離採取　森山哲和（考古造形研究所）
　　松原静雄、菅原兵馬

調査日誌

11月16日(月)　Ａ地点表土除去。
17日(火)　Ａ地点表土除去。
18日(水)　慶応大阿部先生来訪。
　　トレンチ確認とＣトレンチ埋土除去。
19日(木)　慶応大鈴木先生・安藤氏来訪。
　　Ｃトレンチ埋土除去。トレンチ壁面清査。
20日(金)　森山氏来訪。剝離採取作業。
21日(土)　土層断面図チェック。埋め戻し。
22日(日)　平面図作製。埋め戻し。
23日(月)　埋め戻し。
24日(火)　埋め戻し。終了

II　貝塚の位置と環境

上高津貝塚は、茨城県土浦市上高津町字貝塚、柿久保・宍塚町字吉久保に所在している。市の中央を東流して霞ヶ浦に注ぎこむ桜川の右岸にあり、いくつかの小支谷によって侵食された標高約22mの台地上に立地している。この台地は、周囲にいく筋もの小支谷が放射上に侵食し、あたかも一つの独立した台地のごとき環境を有しており、東側の現水田面との比高は約10mを測る。この貝塚は、縄文時代中期末から晩期前半にかけての貝塚で、先の台地の縁辺部に５地点にわたる貝殻の散布が認められ、小・中規模貝塚が台地縁辺を環状にとりまく環状貝塚の典型的形態を呈している。

上高津貝塚は、1906年（明治39年）に大衆小説家江見水陰によって発掘されてから考古学の世界に知られるようになった。その後、戦前の大山史前学研究所の調査を経て、1953年（昭和28年）に清水潤三を代表とする慶応義塾高等学校考古学会によりはじめて正式な学術的調査が行なわれた。これに続き、1968年～1971年の四次にわたり慶応義塾大学民族学・考古学研究室及び東京大学総合研究資料館により継続的な調査が行なわれた。この時点で、貝塚は、台地縁辺にそって東側からＡ～Ｅの５地点に分けられ、慶応大学がＡ地点を東京大学がＢ地点の一部を調査し、貝塚部分における多くの資料と多大な成果を挙げている。

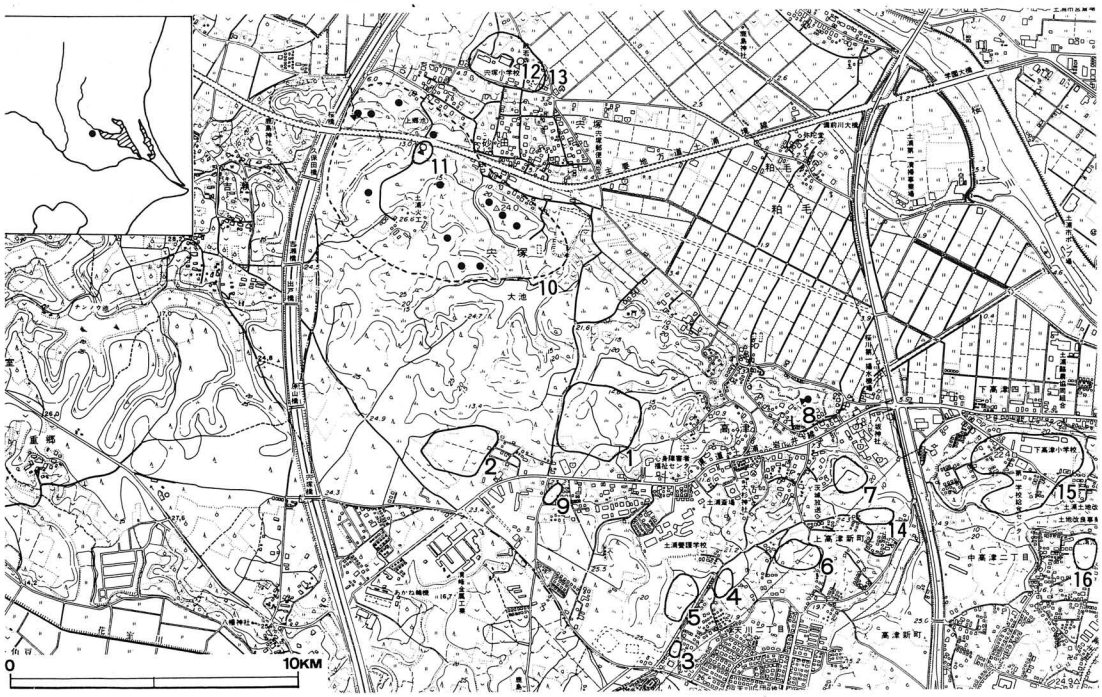
これ以降、上高津貝塚における学術的な調査は行なわれていないが、1977年には国の史跡指定を受け、台地から斜面部にかけての44,048.42㎡が国指定史跡となっている。そして、1981年から市による史跡指定地の買収がはじまり、1986年には指定地すべての市有化が完了している。

上高津貝塚の周辺には、多くの原始・古代の遺跡が分布している。貝塚北側に隣接した宍塚大池周辺の丘陵上には宍塚古墳群が存在し、五基の前方後円墳と二十基あまりの円墳から構成されていた。この古墳群は、古墳時代後期の古墳群で、1968年には二基の前方後円墳（１・６号墳）と一基の円墳（５号墳）が、1979年には一基の円墳（18号墳）が発掘調査され、金環や埴輪が検出されている。また、谷をはさんだ西側には、縄文時代中期及び古墳時代前・中期を主体とする栗崎遺跡がある。採集される縄文時代の資料は、その大部分が縄文時代中期中葉を中心とするものであり、分布範囲が示す遺跡の規模からみても、上高津貝塚に先行する大規模集落の存在が予想され、上高津貝塚の成立過程を考えるうえでも重要かつ注目すべき遺跡と考えられる。

土浦市では、今後上高津貝塚を史跡公園として整備していく計画でおり、その点、先に述べた周辺遺跡との関連性を考慮し、総合的見地に立ち整備をすすめていく必要性が考えられる。

参考文献

「茨城県土浦市上高津貝塚発掘調査報告」「Archaeology」19　慶応義塾高等学校考古学会　1954
T.Akazawa「Report of the Investigation of the Kamitakatu Shellmiddenn Site」1972
「茨城県資料　考古資料編　先土器・縄文時代」茨城県史編さん第一部会　1979
「土浦の遺跡」　土浦市教育委員会　1984
「常陸宍塚」　国学院大学宍塚調査団　1971
「筑波古代地域史の研究」筑波大学　1981



第１図　上高津貝塚・周辺の遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	種類	時代	遺跡の概要
1	上高津貝塚	上高津町字貝塚、柿久保・宍塚町吉久保	貝塚	縄文（中・後・晩）	貝殻、縄文土器散布
2	栗崎遺跡	上高津町字栗崎	包含地	縄文（中）、弥生、古墳（前・中）	縄文土器、弥生土器、土師器散布
3	宮脇庚申塚	上高津町字宮脇	塚	近世	８基の塚現存
4	宮脇Ａ遺跡	上高津町字宮脇	包含地	平安	土師器散布
5	宮脇Ｂ遺跡	上高津町字宮脇	包含地	縄文（中）、平安	縄文土器、土師器、須恵器散布
6	新町遺跡	上高津町字新町	包含地	平安	土師器、須恵器散布
7	寄居遺跡	上高津町字寄居	包含地	古墳（前・後）、平安	土師器、須恵器散布
8	幕下女騎古墳	上高津町字幕下女騎	包含地	古墳	前方後円墳
9	出シ山遺跡	上高津町字出シ山	包含地	平安	土師器散布
10	宍塚古墳群	宍塚町字大日山、上郷後、不動後、向山	古墳群	古墳（後）	前方後円墳４基、円墳９基現存
11	宍塚遺跡	宍塚町字大日山	集落跡	弥生	住居跡約10軒確認
12	竜王山古墳	宍塚町西屋敷	古墳	古墳（後）	墳丘湮滅
13	般若寺跡	宍塚町西屋敷、寺後他	寺院跡	中世	陶磁器、古瓦散布
14	うぐいす平遺跡	上高津町新町	包含地	古墳（前・後）、平安	土師器、須恵器散布
15	下高津小遺跡	下高津町	包含地	古墳（後）、平安	土師器、須恵器散布
16	西原遺跡	中高津町字西原	包含地	古墳（後）、平安	土師器、須恵器散布

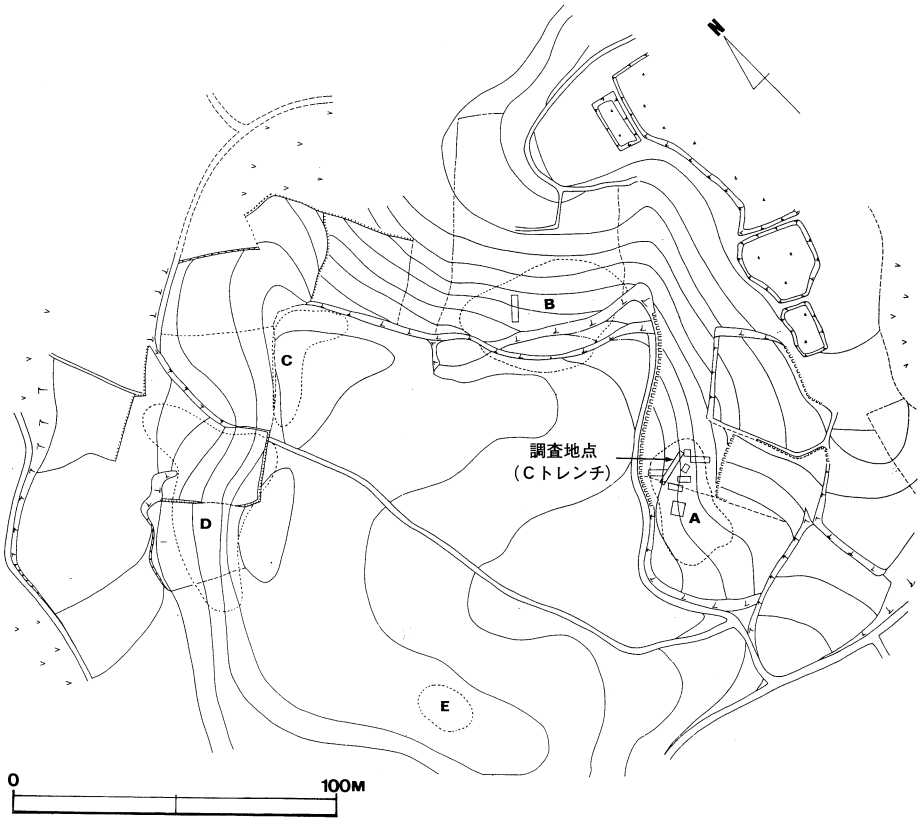
第１表　周辺の遺跡一覧

III　調査区と調査方法(第２図参照)

今回発掘調査を行なった地点は、上高津貝塚Ａ地点にあたり、昭和43・44・46年の各年に（２次・３次・５次）慶応義塾大学考古学研究室によって、三回に渡り発掘調査の行なわれた地点である。

今回の調査は、貝層断面の剝離採取のみを目的とするものであったため、過去の発掘調査のトレンチを再発掘し、貝層断面を剝離することにした。

慶応義塾大学民族考古学研究室に存する、各次調査の図面、日誌、写真等を検討した結果、２次調査Ｃトレンチ２区・３区付近に、ヤマトシジミを主体とする良好な純貝層の遺存が予想されたことから、２次調査Ｃトレンチを第一候補として、再発掘することに決定した（２次調査Ｃトレンチは、東西方向に設定された、長さ12m、幅２ｍのトレンチで、西方から２ｍ毎に１～６区に区分されている）。また、何らかの障害によって、Ｃトレンチの貝層が剝離採取困難となる場合に備え、カキを主体とする薄い純貝層が存在する、５次調査のトレンチも併せて再発掘することにした。しかし、Ｃトレンチ内純貝層の遺存状態が極めて良好であることが調査の初期に確認されたため、５次調査のトレンチは一部分再発掘したのみに留った。



第２図　上高津貝塚測量図･トレンチ位置図

Ⅳ　調査概要（第３・４図参照）

1.層序について

２次調査Ｃトレンチ内の土層は、当時の調査において、混土貝層Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、純貝層、貝層下土層の５層に区分されている。今回の調査は、Ｃトレンチの東半を再発掘したのみであったが、２次調査の図面、日誌等を検討した結果、これらの層の内、混土貝層Ⅲ、純貝層、貝層下土層の３層に対応すると考えられる層が確認された。しかし、調査期間の関係上、新たに土層断面図を作成することが出来ず、また、各土層の内容に関しても、Ｃトレンチ両壁の視覚的な観察を行なったのみである。従って以下では、２次調査時の土層区分を元に、今回の調査において確認された知見をまとめていくことにする。

旧調査において混土貝層Ⅲとされた層は、厚さ１m以上に達する層である。本層は、今回の調査で、更に数層の混土貝層、混貝土層に区分し得ることが確認された。いずれの貝層も、貝種はヤマトシジミが主体となるが、オキシジミ、ハマグリ等が目立つ層も存在する。土器や骨角器、獣骨、魚骨等の包含量が極めて多く、貝層剝離時においても、土器、獣骨が多数採取された。土器は、一部の安行系土器を除いて、その殆どが加曽利Ｂ式土器である。旧調査においても、加曽利Ｂ式土器を中心に多量の土器が出土している。

旧調査で純貝層とされた層は、今回の調査で、薄い混土貝層を挟んだ２枚の純貝層に細分し得ることが確認された。２枚の純貝層は、共にヤマトシジミを主体とし、オキシジミ、ハマグリを多く含んだ、混土率の低い層である。断面観察の上では、上下の純貝層の貝種組成に大きな違いは認められなかった。旧調査時の出土土器は、ほぼ加曽利Ｂ式土器に限られ、本層の形成時期も加曽利Ｂ式期と考えられる。

貝層下土層は、褐色を呈する粘性の強い土層である。炭化物を含むほか、土器、獣骨の包含量が多い。今回の調査では、土層断面の清掃時に、土器を中心として比較的多くの遺物が出土した。出土した土器の多くは、堀之内式に比定されるものである。また、加曽利Ｅ式土器も少量認められた。これらは、旧調査時の所見ともよく一致している。

2.　出土遺物について

今回の調査は、貝層断面の剝離採取を目的とした過去のトレンチの再発掘であるため、出土した遺物は概して少ない。その多くは、土層断面清掃時、剝離採取時に出土したものである。

土器

前述のように、混土貝層Ⅲ、純貝層より採取された土器は、若干の安行系土器を除き、ほぼ加曽利Ｂ式土器に限られる。特に加曽利ＢⅠ式土器に比定されるものの比率が高い。ただし、２次

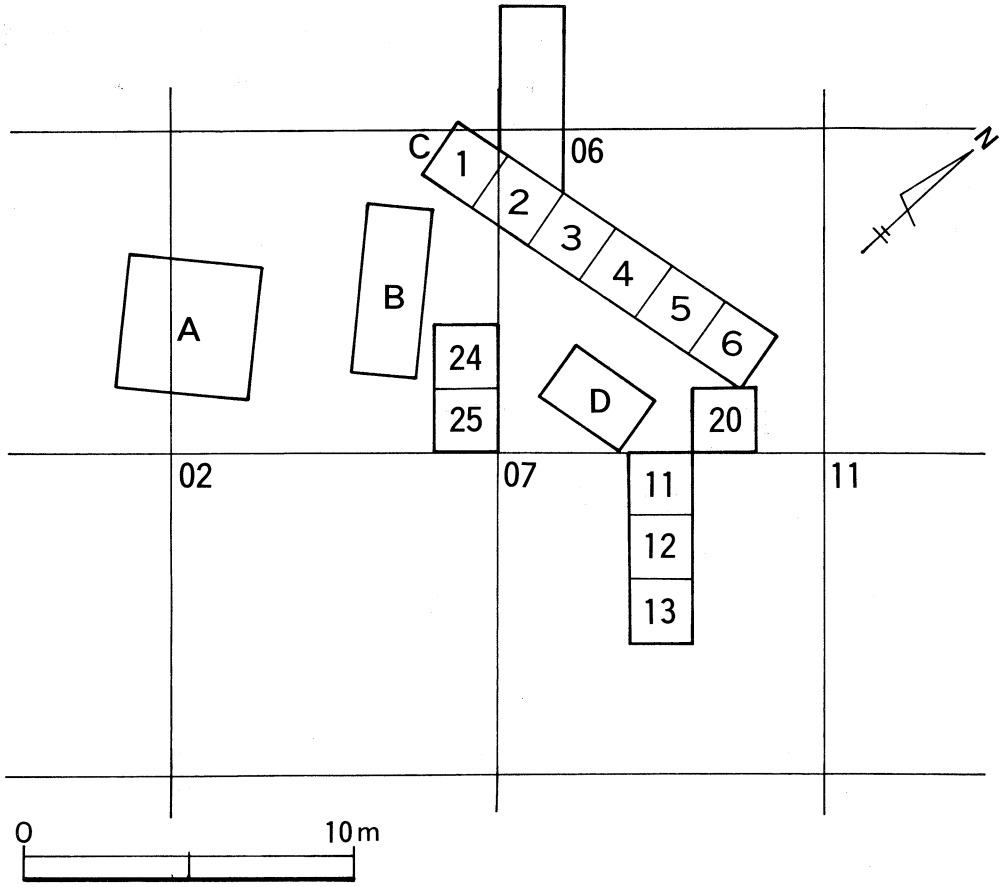
調査の出土土器には、加曽利ＢII式、ＢIII式に比定されるものも少なからず認められ、貝層形成時期が加曽利ＢＩ式期のみに限定されるわけではないようである。

貝層下土層からは、断面清掃時に堀之内式土器の大型破片が比較的多く出土した。堀之内Ｉ式、II式ともに認められるが、特にＩ式新段階～II式古段階のものが目立つようである。

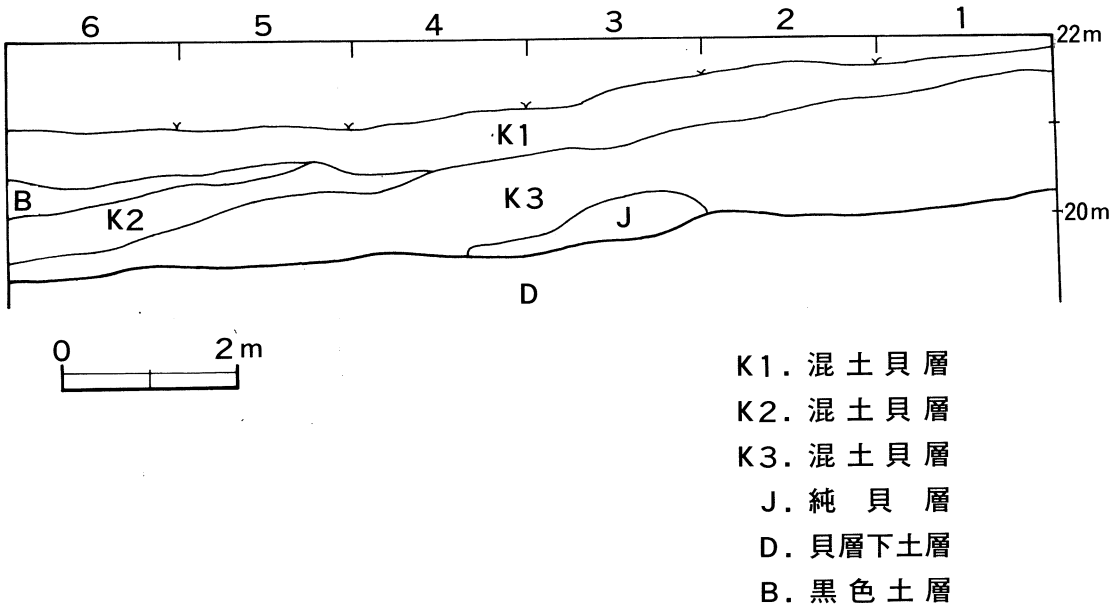
自然遺物

貝層を構成する貝類は、混土貝層III、純貝層ともに、ヤマトシジミを主体とし、オキシジミ、ハマグリがこれに継ぐようである。また、サルボウ、カガミガイ、カキ、シオフキ、アサリ、ウバガイ、アカニナ、ウミニナなども少なからず認められた。

今回の調査では、貝層及び貝層下土層清掃時に、獣骨、魚骨類も比較的多く出土した。獣骨では、シカ、イノシシが目立ち、椎骨、四肢骨片が多い。頭骨、顎骨も何点か認められた。



第３図　Ａ地点トレンチ詳細図（「Archaeology」19より転載、一部改変）



第4図　Cトレンチ南壁土層断面図（「Archaeology」19より転載、一部改変）

V　貝層の剝離採取

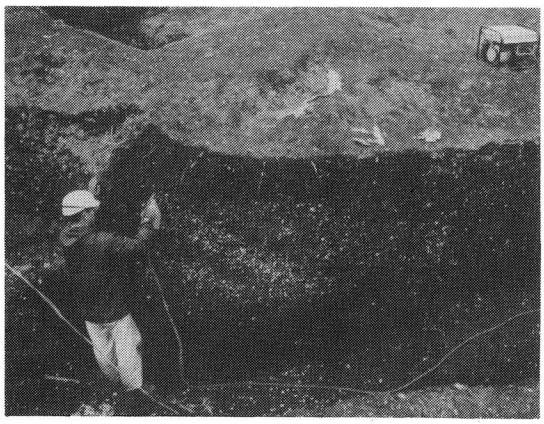
今回の上高津貝塚貝層剝離採取にあたっては、実質的な作業は考古造形研究所森山哲和氏に依頼し実施した。この剝離方法は、森山氏の言う接状剝離法であり、薬品による接着の要領を用い、完全に密でマットな物質の表面の粒子と資料を接着させ剝離するものである。使用する薬品その他の器材等は、主剤としてのHON接状剤、貝層を接着固定させるマットとしてのガラス繊維状布及び主剤の薄め液としての希釈剤、また器材としては吹きつけ器、ハケ、ポリバケツ、作業用の防塵メガネ、ゴム手袋、有機マスク等があり、採取後の固定等の表面処理に使用する保護膜としてのOH822がある。接状剝離は、対称物を非常に薄く剝離（5㎜前後）することが可能であり、今回のように展示使用を第一の目的とする場合遺構の損傷を必要最小限に止める利点がある。

森山氏は、接状剝離そして型取りによる離状剝離等の保存処理を総称して造形保存と呼称しており、その三要素のなかに恒久処理による長期保存および展示の可能性を示している。これまでの保存が保存のための保存、すなわち受け身的な保存であったのに対し、その搬出・搬入の簡便性からみても社会教育的立場に立ったさまざまな利用への可能性を示唆されている。このような理念からすれば、今回の剝離採取は接状剝離の長所を十二分かつ効果的に応用できたものと思われる。剝離資料は、Cトレンチの南北両壁面から二枚づつ採取し、北壁の一面を展示に使用した。大きさは、北壁が高さ1.9m×幅2.7m二枚で、南壁が高さ2.1m×幅1.9mと高さ2.1m×幅3.8mで採取した。以下、展示にいたるまでの作業手順を簡単に紹介する。

1．捕獲処理（抽出）

貝層の状態の範囲や、画面構成でトリミングを決定する。

今回は、展示スペースとの関係から、高さ2.0m×幅3.0mを目安とした。



抽　　出

主剤塗布

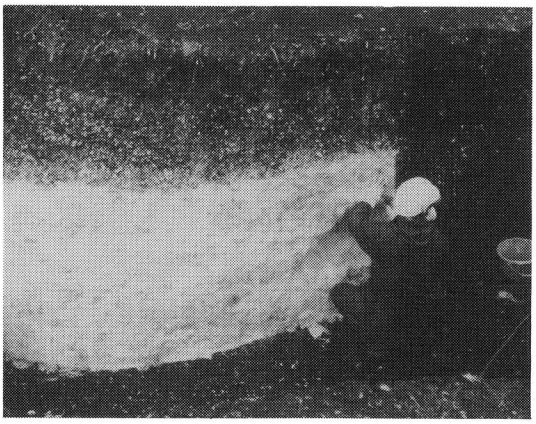
2．主剤塗布

貝層の下部から、2～3回に分けてHONを塗布する。

1㎡にたいして3～4kgを塗布する。

3．耐久処理（補強）

ガラス繊維状の布で補強する。これは、収縮や膨張を防ぐ役割をはたす。



補　　強

剝　離

4．アクセサリー処理

剝離資料の身元保証となる重要なことで、遺跡名・所在地・標高など、できるだけ詳しく記載する。

今回は、展示処理の関係で、標高だけを記載した

5．表面処理（剝離）

貝層の上部から巻き込むように下に剝離してゆく。搬出に便利なように、芯に円筒型を使う場合もある。

剝離後、現地から展示を行なう博物館へ搬出し、そこで、6．洗浄の作業を行なった。洗浄は、反応を示さない異物、すなわち、接着していないものを全部洗い流し、ブラシなどで充分に落としてしまう作業である。そして、一週間程日陰で乾燥したのち、最後に7．恒久処理を行なった。これは、全体の整形や表面に保護膜としての処理を施す作業で、湿った色感なども再生することができる。以上で、剝離作業の全行程は終了した。（参考文献　森山哲和「保存科学－造形保存の方法と意味－」　1982）

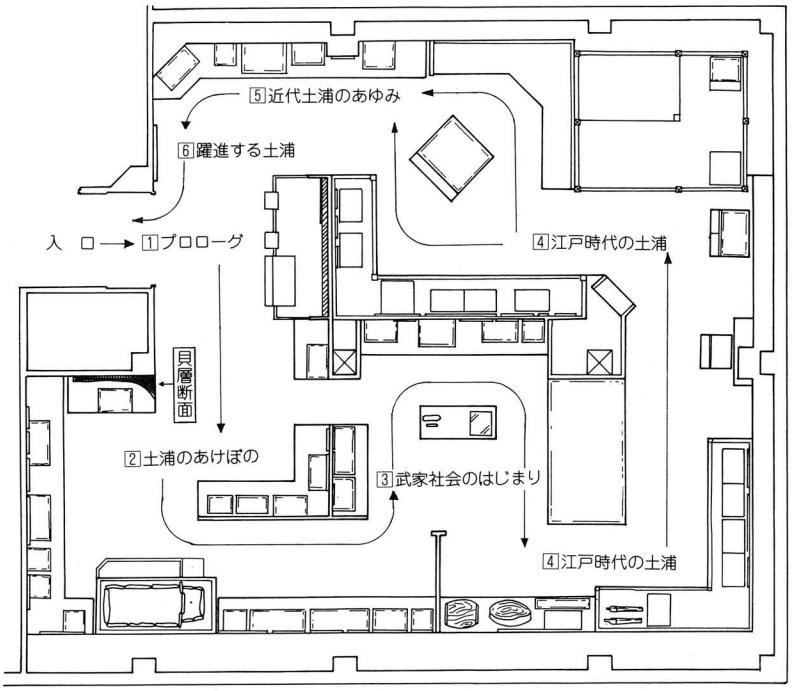
Ⅵ　貝層断面の展示

最後に、博物館における貝層断面の展示方法とその位置付けについて簡単に触れてみたい。

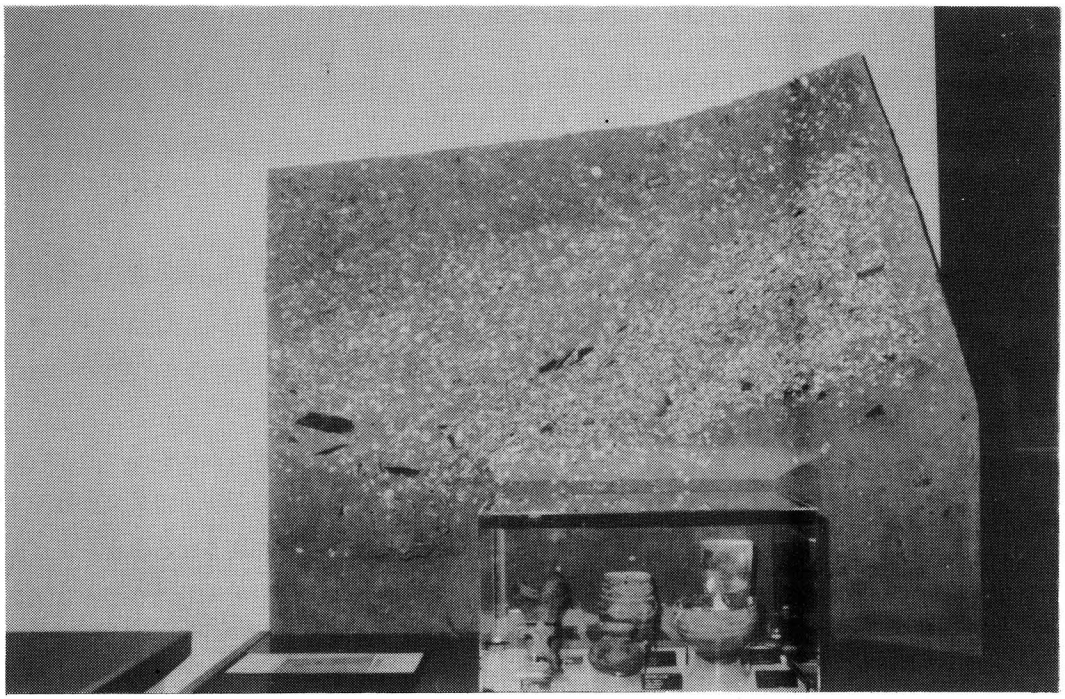
展示には、Cトレンチ北側壁面から採取したものを使用した。これは、この資料の貝層面に土器、獣骨、魚骨、貝輪、骨格器のヤス等の遺物が豊富に含まれており、採取した4枚のうち情報量としてもっとも豊富であったことが第一の理由にある。

大きさは、高さ1.9m×幅2.7mで、板材で裏打ちし、展示室壁面に立てかけられるよう安定性を考慮し補強枠に取り付けた。展示方法は、資料をより生の形で表現するため、資料表面には一切解説は施さず、説明は解説パネルと貝層の模式図によって補った。これにより、貝層断面がより臨場感のあるものになったのではないかと考えている。

展示室における位置付けは、通史展示の原始のコーナーに属し、「貝塚と人々のくらし」というテーマのなかに位置付けられている。展示の意図は、貝層断面の前に貝塚出土の縄文土器や土偶を展示し、土器の年代との対比により貝塚の形成過程を、また貝層内に含まれるさまざまな資料から、上高津貝塚に住んだ縄文時代の人々の生活の様子と貝塚の性格を表現しようというところにある。



第5図　展示室における貝層断面の位置



貝層断面展示状況

国指定史跡　上高津貝塚発掘調査報告書
－貝層断面剝離採取に伴う調査の概要－

発行日　1989年３月31日
編　集　土浦市遺跡調査会
発　行　土浦市教育委員会
〒300　茨城県土浦市下高津２－７－36
TEL　0298(22)2613
印　刷　菊池印刷株式会社